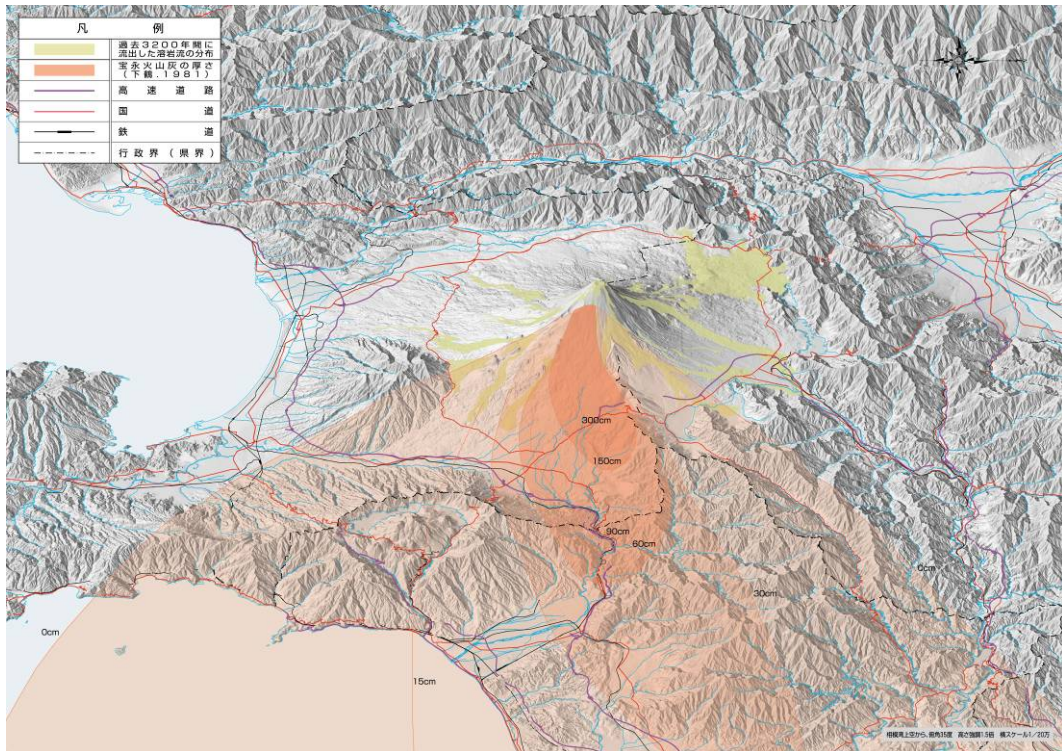


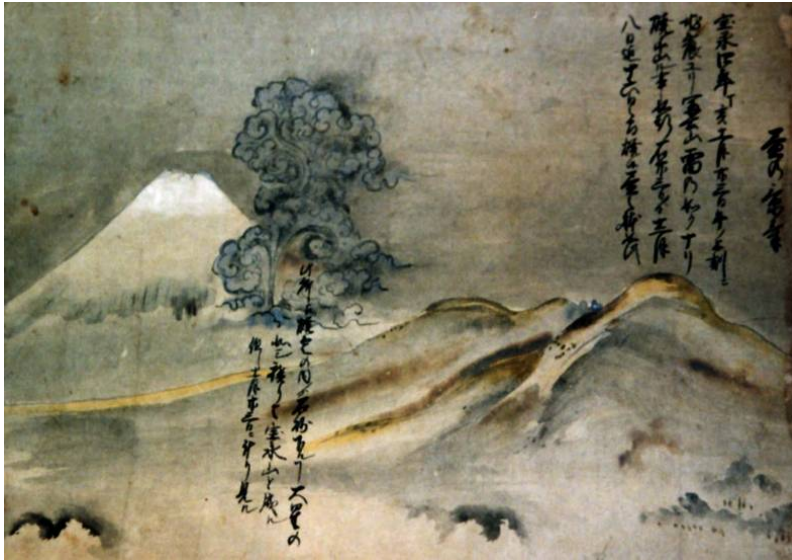


口絵1 南東側山腹から見た宝永山と宝永火口（静岡新聞社提供）



口絵2 宝永噴火で噴出した火山灰層分布

（国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所『富士山宝永噴火と土砂災害』（2003）より転載）



①昼の景気

「宝永四年丁亥十一月二十三日午の上刻に地震揺り、富士山雷の如くなり、焼出る事斯くの如し、石二十三日より十二月八日迄十六日の間焼候 昼の体、此の如し」

「此所へ焼登りの内より石砂下る事大星の如し、積りて宝永山と成る、但し十一月二十三日に計り見る」



②夜ルの景気

「焼物十一月二十三日より十二月八日の夜迄毎夜に此の如く見る、但し二十三日焼初めの夜、別して大きに当所人家の戸はめをならず、同く明ケ七ツ時分に当宿へ焼灰降る事唯一度なり」

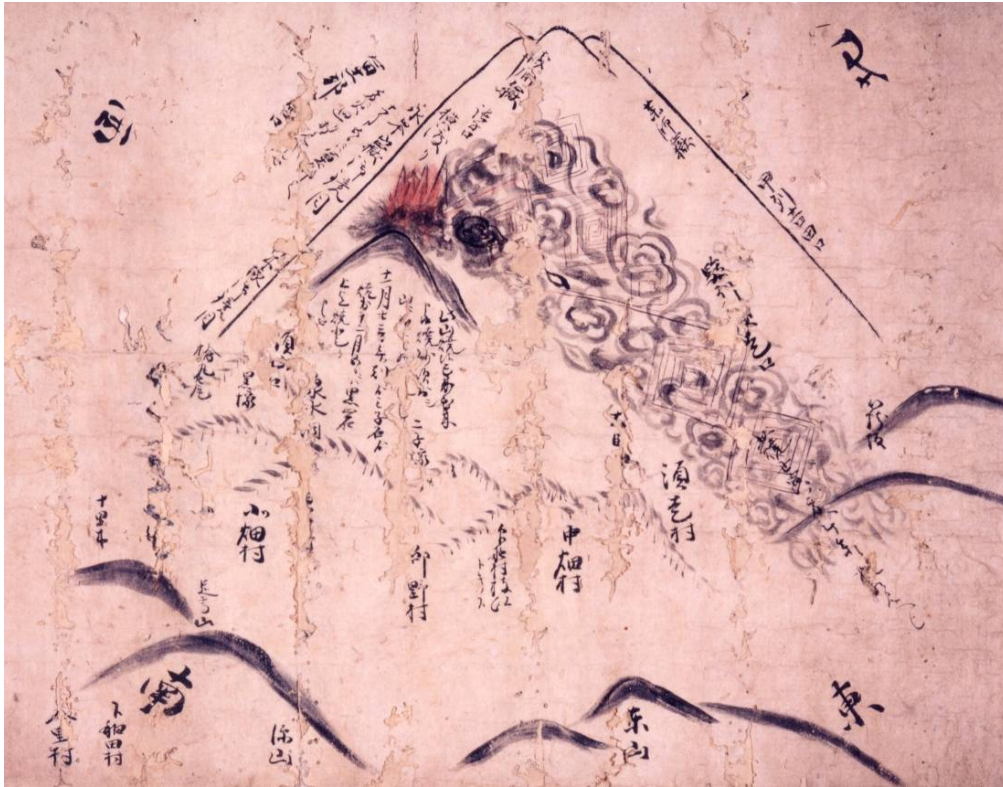
「毎夜稲光りの如く、伊豆天城山辺り迄光り渡る事此の如し」



③焼納りの景気

「右十六日の間焼け、十二月九日の朝明ケ七ツ時分頃、大きに一ツ鳴る、九日には山晴れ渡り見る事此の如し、宝永山出来る」

口絵 3～5 宝永噴火を描いた絵図 (静岡県沼津市土屋博氏所蔵)



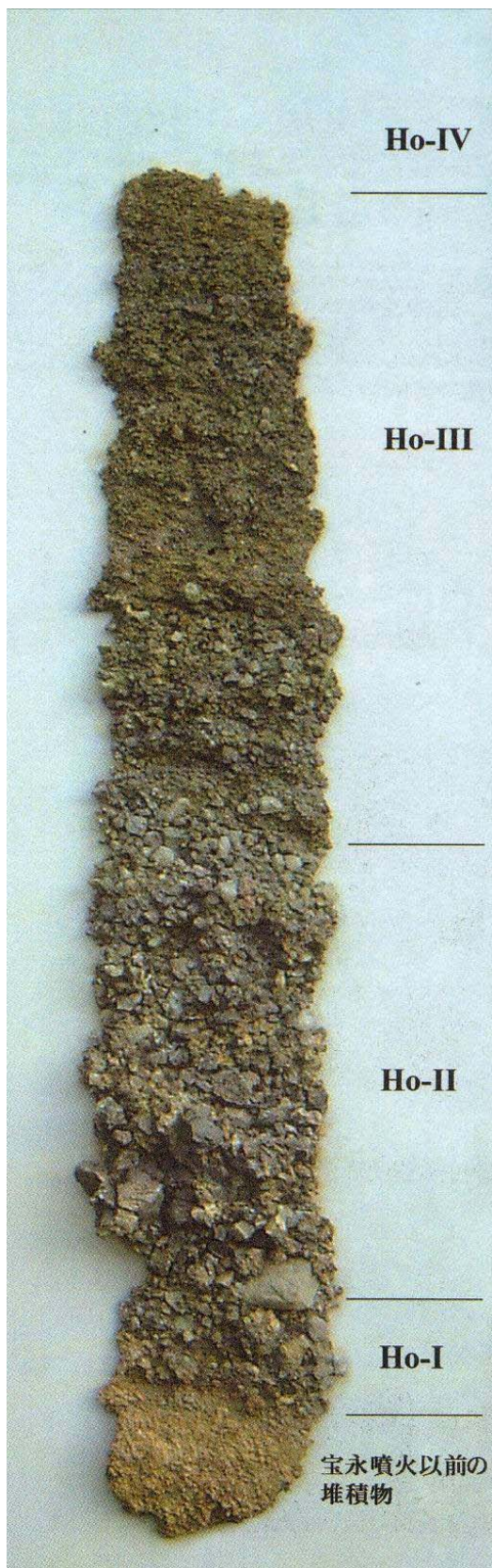
口絵6 富士山宝永噴火之図 (静岡県御殿場市滝口文夫氏所蔵)

須走口を襲う火砕流について、「此焼丑寅ノ方へ計参候と相見へ申候」とあり、宝永山については、「十二月二十三日亥刻より峰石より焼け出、十二月五日には黒岩上迄焼け登り申す」と付記している。



口絵7 大日堂付近の宝永スコリアの堆積状況

(静岡県東富士演習場内、日本工営・田島靖久氏撮影)



Ho-IV

Ho-IV 細粒なスコリア層
宝永4年12月2日（1708年1月1日）午後3時頃

Ho-III

Ho-III 黒色の玄武岩質でやや緻密なスコリア
宝永4年11月24日（1707年12月17日）午前11時頃

Ho-II

Ho-II 黒色でサイコロ状の安山岩質の軽石やスコリア
宝永4年11月23日（1707年12月16日）午後4時頃

Ho-I

Ho-I 軽石層
宝永4年11月23日（1707年12月16日）午前10時頃

宝永噴火以前の
堆積物

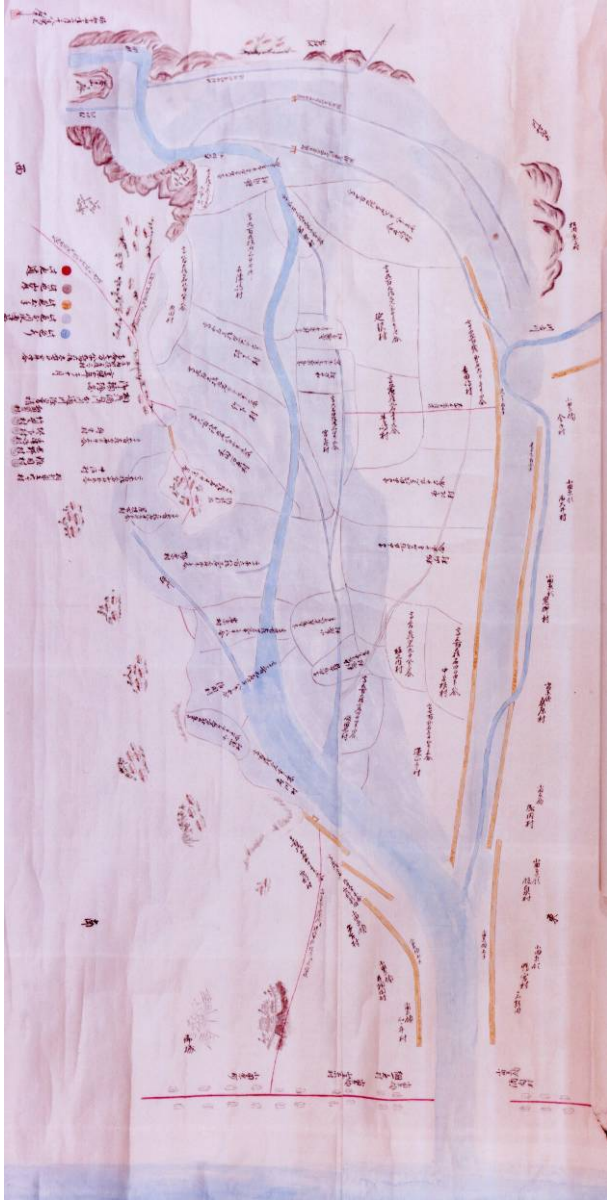
口絵8 富士山東南麓におけるニツ塚南トレンチの剥ぎ取り断面（静岡県御殿場市中畑）
（国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所『富士山宝永噴火と土砂災害』（2003）より一部改変して転載）



口絵9 河村城跡の「天地返し」の遺構 (神奈川県山北町教育委員会撮影)



口絵10 宝永火山灰天地返しの模式図 (土砂崩埋蔵氏作成)

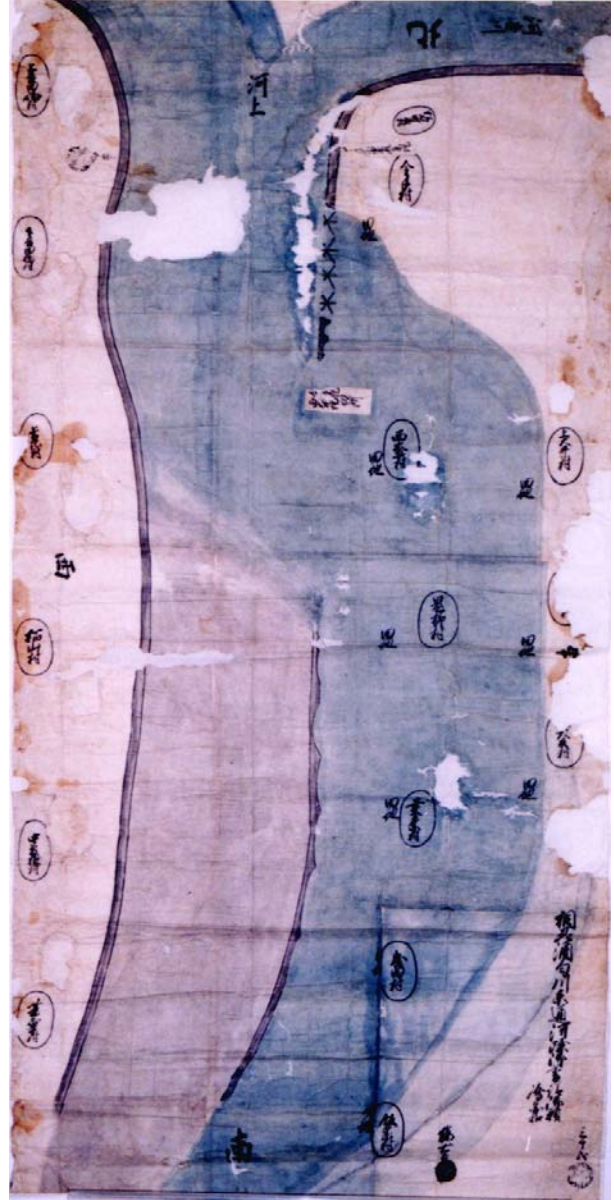


口絵11 享保5(1720)年相州酒匂川本通川除
こふしんおねがい
御普請御願絵図(写)

(小田原市立図書館蔵、原史料は明治大学博物館所蔵瀬戸家資料)

正徳元(1711)年7月29日の大出水により大口堤で決壊した酒匂川は、本流より西側を南流し、支流の狩川に流れ込み、享保11(1726)年、田中休愚によって大口堤の閉め切りがなされるまで、そのまま西流し続けた。

この絵図は、享保5年9月に幕府勘定吟味役辻守参が水下21か村を視察した際に、被災村が大口堤の閉め切りを願うために作成された下書きの絵図と考えられる。



口絵12 享保18(1733)年相州酒匂川東通河除
御普請御願絵図(神奈川県小田原市酒井茂男氏所蔵)

享保13(1728)年以降、支流川音川との合流点下流で決壊した酒匂川は、何度も左岸(東岸)地域へ氾濫した。同18年、水下となった東通り6か村は、水害による困窮のため、助郷役免除を幕府代官に願っている。この絵図は、その願書に添えられた絵図の控と考えられる。



口絵13 大口堤上の文命堤東碑
(神奈川県南足柄市班目)



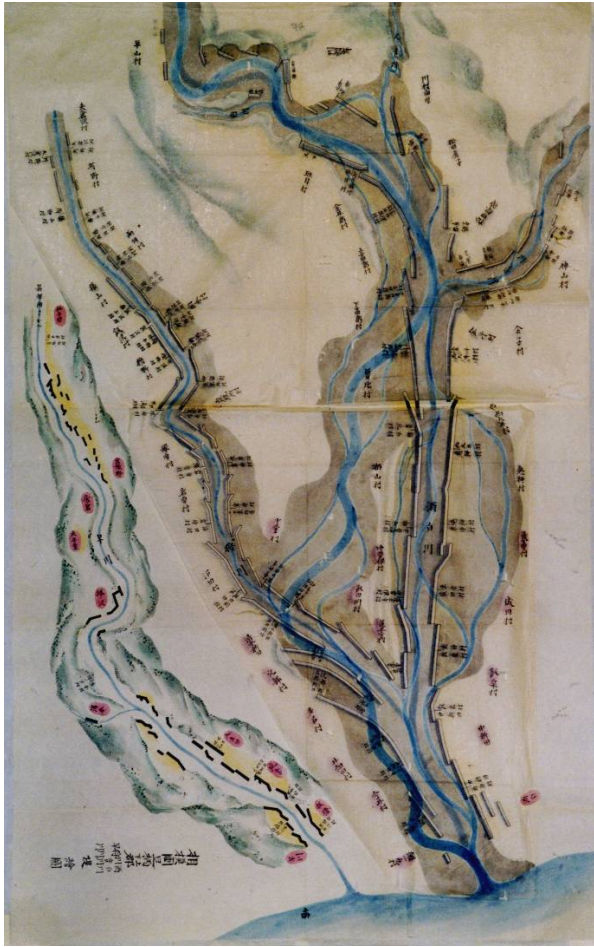
口絵14 岩流瀬堤上の文命西碑
(神奈川県山北町岸)



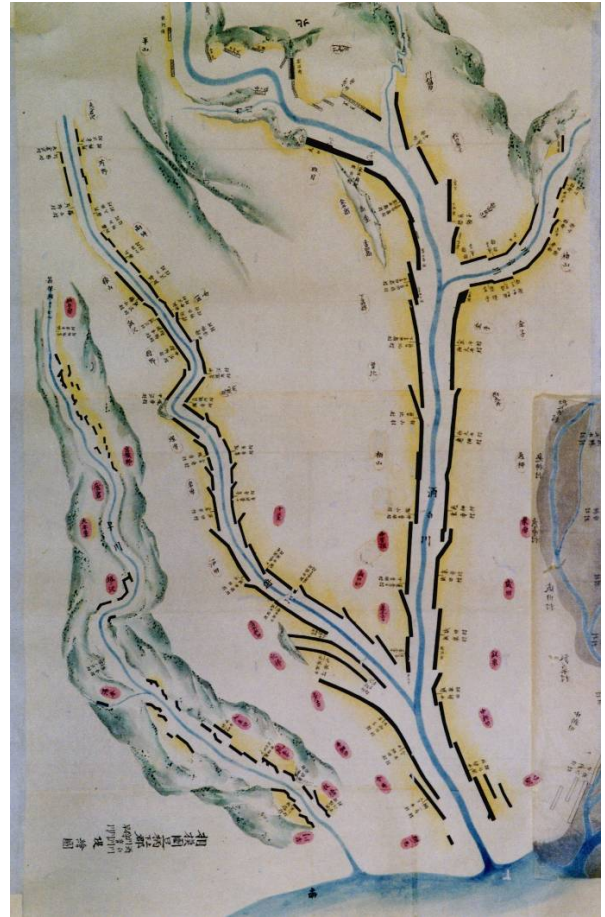
口絵15 吉田島祖師堂そばに残る水神
(神奈川県開成町)



口絵16 川丈六地蔵の一つ多古の
「おそっさん」 (神奈川県小田原市)



①年不詳の絵図であるが、氾濫箇所・流路などから、享保19（1734）年8月7日の堤決壊・土砂災害を示しているのではないかと推測される。



②幕府代官蓑正高の手によって実施された治水事業後における酒匂川の堤体系を図示した絵図ではないかと考えられる。流路に沿って、本・支流ともに霞堤が間断なく連なる様子が見て取れる。

口絵17～18 相模国足柄上下郡酒匂川・川音川・狩川・早川堤絵図
 (神奈川県小田原市小澤淑男氏所蔵)